推薦図書

川手鷹彦 著『「魔女ランダ」への道』

一般財団法人　花の家

バリにて偉大なる師を得て、さらなる深遠を求めて身を投じた川手先生ご自身の魂磨きの実録書。近しく関わりのある一部の人たちしか知り得なかったであろうその内容は、「何故これ程までに究極を求めるのか…」と思える驚きの体験談でした。

先生は著名な思想家、教育家、芸術家たちの叡智に多くを学び、実践的な修行を求めて20代後半に渡欧、「言語造形」を主とする技術を修め、スイスとドイツにて演出家・舞台俳優業をする中、「心の保護を求める子どもたち」の治療教育に携わっていました。帰国後はルドルフ・シュタイナーの人智学を始めとするヨーロッパの神秘主義の啓蒙に努めつつ、子どもたちの治療教育・芸術教育に心血を注がれ今に至る、とここまでは多くの人が知るところです。しかし究極を求める道はさらに続き、修練の場をバリに求めた姿が書には記述されていました。

「求めよ、さらば与えられん」、そして「何事も必然で起こる」。これらの言葉通りにバリにて重要な機縁ともいえる人物と出会い、後の人生を大きく（深く）変えることとなります。その縁は、バリの伝統文化であり最も神聖な儀式の一つである「ランダ舞」に関わることで、最高峰ともいえる霊的時空へと先生の魂を誘いました。

バリの舞踊は善悪が表現されると一般的には知られていますが、先生が足を踏み入れた儀礼舞踊の世界は僧侶の資格保有者に加えて、特別な儀礼を通過した人格者だけが資格を得て舞うことができるという正に霊的な「場」でした。しかもこの場は、ともすれば心身が蝕まれる場です。異国人でありながら、崇高であり過酷なこの場に立つことを許された先生の身の上（心身）がどのようになっていったか……。

何故その場だったのか、私たちの想像を超えたその領域は頁を追うごとに明らかになっていき、先生が目指す世界がはっきりと映し出されていきます。そして、日本での「治療教育」の礎を揺ぎ無いものとするための最後の修練の「場」であったと気付かされます。道を一途に真摯に歩む先生の姿に触れた時、胸熱く、ただただ頭が下がる思いでした。

「極めるとは、そういう事だよ……」と、道こそ違えど、探求・追求の山坂を歩んで来た田村の声が聞こえてきます。